

Sun Fire X4800 サーバー設置マニュアル (Oracle VM 版)



Part No: 821-2261-10
2010年7月、Revision A

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, the use, duplication, disclosure, modification, and adaptation shall be subject to the restrictions and license terms set forth in the applicable Government contract, and, to the extent applicable by the terms of the Government contract, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software License (December 2007). Oracle America, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション（人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む）への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したことに起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

Oracle と Java は Oracle Corporation およびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

AMD、Opteron、AMD ロゴ、AMD Opteron ロゴは、Advanced Micro Devices, Inc. の商標または登録商標です。Intel、Intel Xeon は、Intel Corporation の商標または登録商標です。すべての SPARC の商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc. の商標または登録商標です。UNIX は X/Open Company, Ltd. からライセンスされている登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

目次

はじめに	5
製品情報 Web サイト	5
関連マニュアル	5
このドキュメントについて (PDF および HTML)	7
ドキュメントのコメント	7
変更履歴	8
Oracle VM のインストールの概要	9
OS をインストールする前の準備作業	11
ブートハードディスクの消去方法	11
仮想ディスクの作成	12
メディアの取得方法の選択	29
シリアルポートまたはビデオポートを使用したコンソールへのアクセスによる ローカルインストール	29
ILOM を使用したコンソールへのアクセスによるリモートインストール	32
Oracle VM のインストール	39
システム要件	40
Oracle VM ソフトウェアの入手方法	41
Oracle VM Server のインストール方法	41
Oracle VM Manager のインストール方法	42
VM リソースの作成および管理	43

はじめに

ここでは、関連するドキュメントと、フィードバックを送信するプロセスについて説明します。またドキュメントの変更履歴も示します。

- 5 ページの「製品情報 Web サイト」
- 5 ページの「関連マニュアル」
- 7 ページの「このドキュメントについて (PDF および HTML)」
- 7 ページの「ドキュメントのコメント」
- 8 ページの「変更履歴」

製品情報 Web サイト

Sun Fire X4800 サーバーの詳細については、Sun Fire X4800 サーバーの製品サイトを参照してください。

<http://www.oracle.com/goto/x4800>

このサイトには、次の情報やダウンロードへのリンクがあります。

- 製品情報および仕様
- サポートされているオペレーティングシステム
- ソフトウェアおよびファームウェアのダウンロード
- サポートされているオプションカード
- 外部ストレージオプション

関連マニュアル

次の一覧は、Oracle Sun Fire X4800 サーバーに関連するドキュメントの一覧です。これらのドキュメントとその他のサポートドキュメントは、次の Web サイトで入手できます。

<http://www.oracle.com/goto/x4800>

ドキュメントグループ	マニュアル名	説明
Sun X4800 サーバー固有のドキュメント	<p>Sun Fire X4800 サーバー製品ドキュメント</p> <p>『Sun Fire X4800 サーバーご使用の手引き』</p> <p>『Sun Fire X4800 サーバー設置マニュアル』</p> <p>『Sun Fire X4800 サーバーご使用にあたって』</p> <p>『Sun Installation Assistant 2.3 through 2.4 User's Guide for x64 Servers』</p> <p>『Sun Fire X4800 サーバー Oracle Solaris オペレーティングシステム設置マニュアル』</p> <p>『Sun Fire X4800 サーバー Linux オペレーティングシステム設置マニュアル』</p> <p>『Sun Fire X4800 サーバー Windows オペレーティングシステム設置マニュアル』</p> <p>『Sun Fire X4800 Server Diagnostics Guide』</p> <p>『Sun Fire X4800 サーバーサービスマニュアル』</p> <p>『Sun Fire X4800 Server Safety and Compliance Guide』</p> <p>『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 補足マニュアル Sun Fire X4800 サーバー』</p> <p>『Sun x64 Server Utilities Reference Manual』</p> <p>保守ラベル</p>	<p>アスタリスク (*) が付いているすべてのドキュメントの統合 HTML 版。検索と索引が含まれる。</p> <p>図を多用した、設定のためのクイックリファレンス。</p> <p>最初の電源投入までの、サーバーの設置、ラック取り付け、および設定方法。</p> <p>サーバーに関する重要な最新情報。</p> <p>サポート対象の Windows または Linux OS の補助付きインストール、ファームウェアのアップグレード、およびその他の作業に使用する Sun のツール。</p> <p>Oracle Solaris OS をサーバーにインストールする方法。</p> <p>サポート対象の Linux OS をサーバーにインストールする方法。</p> <p>サポート対象のバージョンの Microsoft Windows をサーバーにインストールする方法。</p> <p>サーバーの問題を診断する方法。</p> <p>サーバーのサービスと保守の方法。</p> <p>サーバーの安全性および適合性に関する情報。</p> <p>サーバーの Integrated Lights Out Manager のバージョン固有の補足情報。</p> <p>サーバーにインストールされているユーティリティの使用方法。</p> <p>シャーシと CPU モジュールにある保守ラベルのコピー。</p>

ドキュメントグループ	マニュアル名	説明
Sun Integrated Controller Disk Management	『Sun x64 Server Disk Management Overview』	サーバーの記憶域の管理に関する情報。
x86 Servers Applications and Utilities Reference Documentation	『Sun x64 Server Utilities Reference Manual』	サーバーにインストールされているユーティリティの使用方法。
Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 Documentation (以前の Sun Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 ドキュメント)	『Sun Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 Features Updates and Release Notes』	ILOM の新機能に関する情報。
	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 Getting Started Guide』	ILOM 3.0 の概要。
	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 Concepts Guide』	ILOM 3.0 の概念に関する情報。
	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 Web Interface Procedures Guide』	ILOM を Web インタフェースを通じて使用する方法。
	『Oracle Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 CLI Procedures Guide』	コマンドによって ILOM を使用する方法。
	『Sun Integrated Lights Out Manager (ILOM) 3.0 Management Protocols Reference Guide』	管理プロトコルに関する情報。

このドキュメントについて (PDF および HTML)

このドキュメントセットは、PDF および HTML の両形式で利用できます。トピックに基づく形式 (オンラインヘルプと同様) で情報が表示されるため、章、付録、およびセクション番号は含まれません。

ドキュメントのコメント

製品ドキュメントの品質向上のため、お客様のご意見、ご要望をお受けしております。コメントは下記よりお送りください。

<http://www.sun.com/secure/products-n-solutions/hardware/docs/feedback>

ご意見をお寄せいただく際には、下記のタイトルとパーツ番号を記載してください。

変更履歴

このドキュメントセットには次の変更が加えられています。

- 2010年4月 - 設置マニュアルのリリース
- 2010年6月 - 設置マニュアルおよびご使用の手引きの再リリース
- 2010年7月 - その他のドキュメントの初回リリース

Oracle VM のインストールの概要

本書では、Oracle VM のインストールについて説明し、Oracle Solaris のインストールガイドを紹介します。本書では次の項目について説明します。

説明	リンク
ハードディスクの既存のパーティションを消去して、オペレーティングシステムのインストール先となる仮想ディスクを作成する方法を説明します。	11 ページの「OS をインストールする前の準備作業」
Oracle VM をインストールする方法を説明します。	39 ページの「Oracle VM のインストール」

OSをインストールする前の準備作業

オペレーティングシステムをインストールするには、事前に特定の作業を行う必要があります。この作業は、OSがブートドライブにすでにインストールされているかどうか、またはこれまでにパーティションが設定されていない新しいドライブであるかどうかによって異なります。

実行する必要があるタスクは次のとおりです。

- [11 ページの「ブートハードディスクの消去方法」](#)
- [12 ページの「仮想ディスクの作成」](#)

▼ ブートハードディスクの消去方法

サーバーのハードドライブに Solaris OS がプリインストールされている場合があります。その場合は、Linux をインストールする前に Solaris OS を消去する必要があります。

始める前に この手順を開始する前に、Tools and Drivers CD を入手してください。



注意-この手順を実行すると、ハードドライブのすべてのデータが消去されます。必要なデータはこの手順を開始する前にバックアップしてください。

- 1 ハードドライブ上の必要なデータをバックアップします。
- 2 サーバーの CD/DVD ドライブに **Tools and Drivers CD** を挿入します。
サーバーに CD/DVD ドライブがない場合は、リモートコンソール (JavaRConsole) を使用します。[32 ページの「ILOM を使用したコンソールへのアクセスによるリモートインストール」](#) を参照してください。
- 3 ツールとドライバの CD からシステムをブートします。
ツールとドライバのメインメニューが表示されます。

- 4 メインメニューから「**Erase Primary Boot Hard Disk**(プライマリブートハードディスクを消去する)」を選択します。
このオプションを選択すると、プライマリハードドライブ上に現在あるすべてのパーティション(診断パーティションを除く)が消去されます。診断パーティションがある場合、これは消去されません。

次の手順 [12 ページの「仮想ディスクの作成」](#)に進みます。

仮想ディスクの作成

オペレーティングシステムをインストールする前に、サーバー上に仮想ディスクを作成して、イメージのダウンロードに必要な領域を確保する必要があります。このダウンロードによってディスクの内容が消去されます。

仮想ディスクは、オペレーティングシステムのダウンロード用の LSI ファームウェアから作成できます。LSI ファームウェアには、サーバーの起動時のみアクセスできます。Windows が起動される前に LSI バナーが表示されているときに、Ctrl キーを押しながら H キーを押すと、LSI インタフェースが表示されます。

注-仮想ディスクは、Tools and Drivers DVD の追加ドライバを通じてインストールされる MegaRAID ソフトウェアから作成することもできますが、オペレーティングシステムのインストールには使用しないでください。

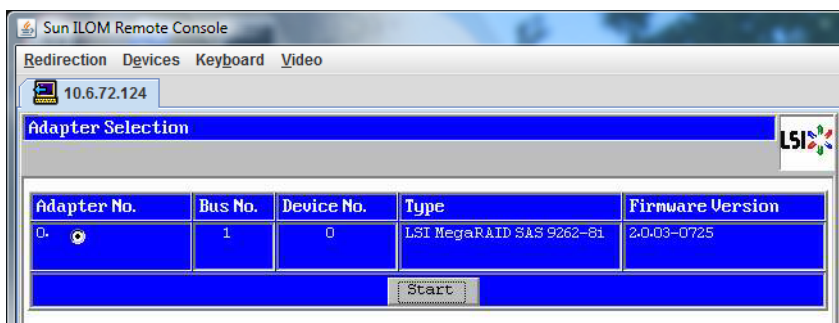
[12 ページの「仮想ディスクの作成方法」](#)を参照してください。

▼ 仮想ディスクの作成方法

- 1 サーバーには、サービスプロセッサ (**Service Processor**、**SP**) モジュールの IP アドレスを使用してログインします。
- 2 GUI ウィンドウで「**Remote Control**」タブをクリックして、**iLOM** リモートコントロールを起動します。
- 3 「**KVMS**」タブを選択します。
- 4 「**Mouse Mode**」で「**Relative**」を選択して、「**Save**」をクリックします。

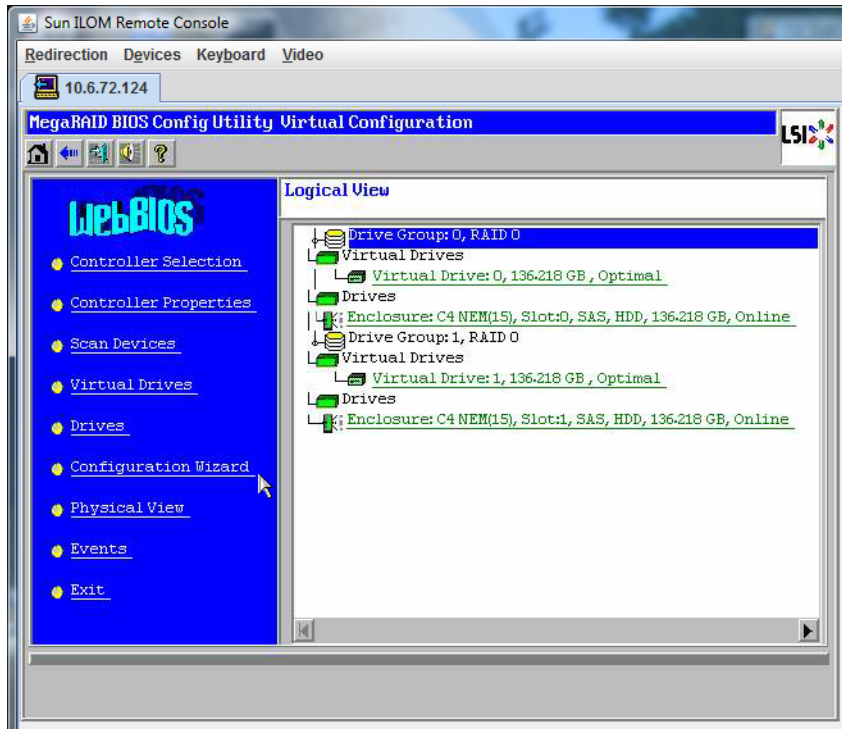
注- 「Relative」 オプションを選択すると、リモートコンソールでマウスをウィンドウからウィンドウに動かすことができるようになります。この手順の最後で、このマウス設定を「Absolute」に変更するよう求められます。

- 5 「Redirection (リダイレクション)」 タブをクリックします。「Redirection」画面で、「Launch Remote Console」をクリックします。
「ILOM 3.0 Remote Console」ウィンドウが表示されます。
- 6 「Devices」メニューで「Mouse」を選択してマウスを有効にします。
- 7 システムを再起動して、LSIバナーが表示されるまで待ちます。バナーページにデバイスが表示されたら、Ctrl キーを押しながら H キーを押します。
- 8 「Adapter Selection」画面で、「Start」をクリックします。

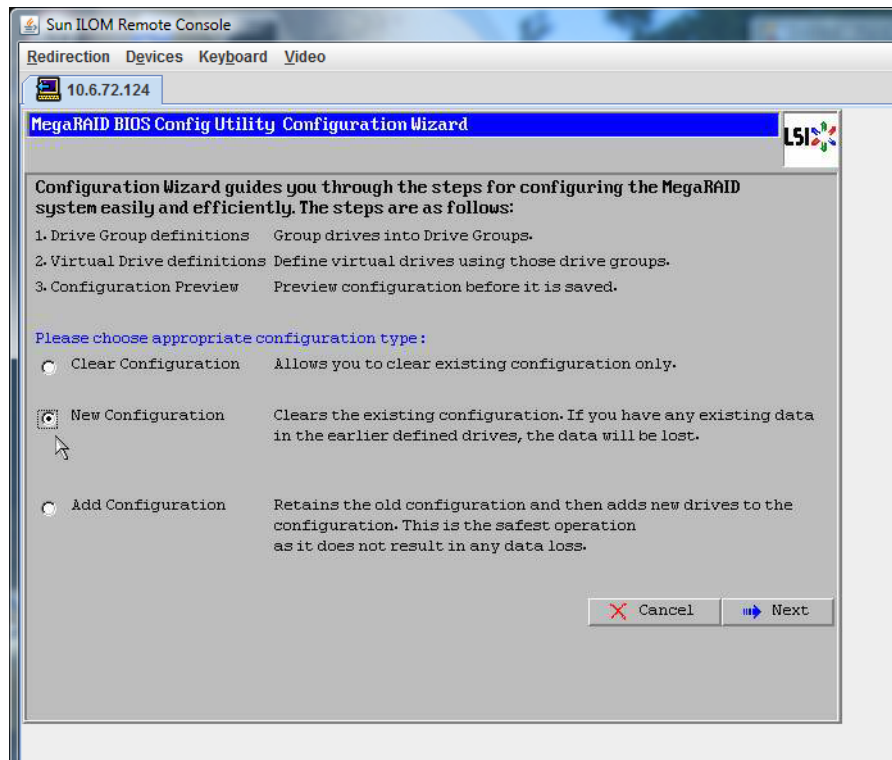


「MegaRaid BIOS Config Utility Virtual Configuration」画面が表示されます。

- 9 「MegaRAID BIOS Config Utility Virtual Configuration」画面で、「Configuration Wizard」を選択します。



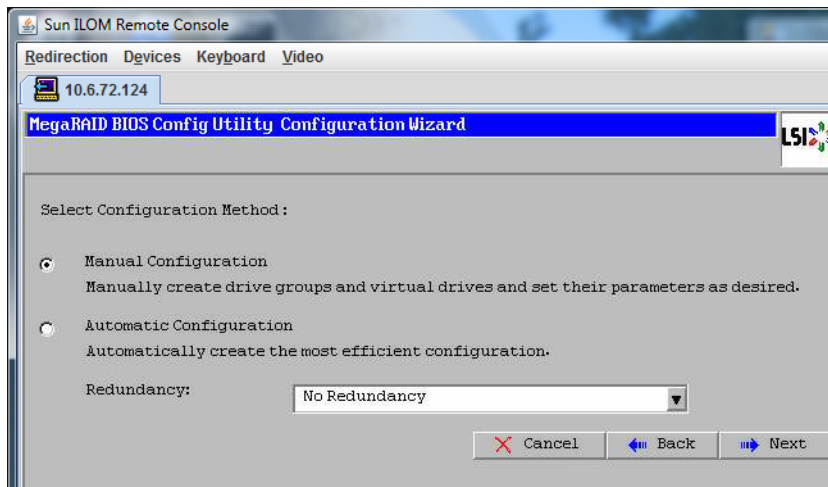
- 10 「Configuration Wizard」画面で「New Configuration」を選択して、「Next」をクリックします。



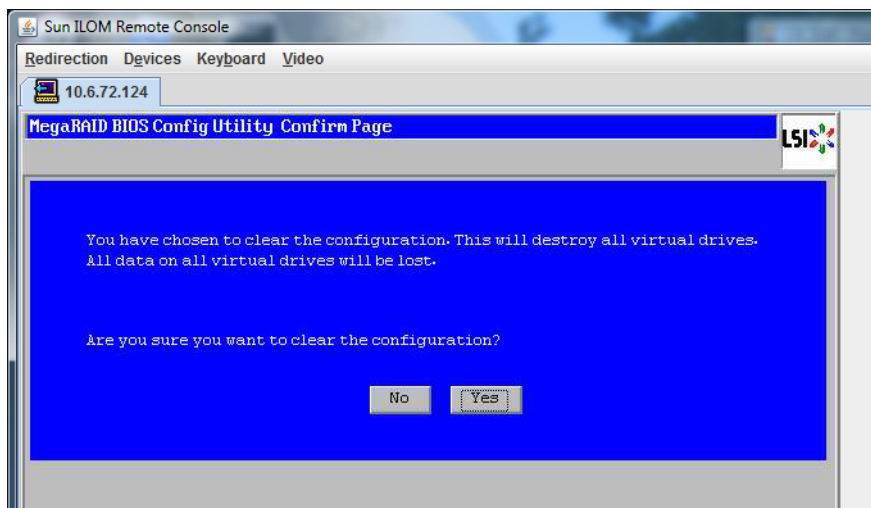
- 11 「Manual Configuration」を選択します。

「Automatic Configuration」を選択すると、システム上のすべてのハードドライブを含む単一の仮想ドライブが作成されます。複数のドライブがストライプセット (RAID0) として設定され、結合された記憶域の単一の仮想ドライブとして表示されます。これは、複数の障害ポイントが発生するため、望ましくない場合があります。

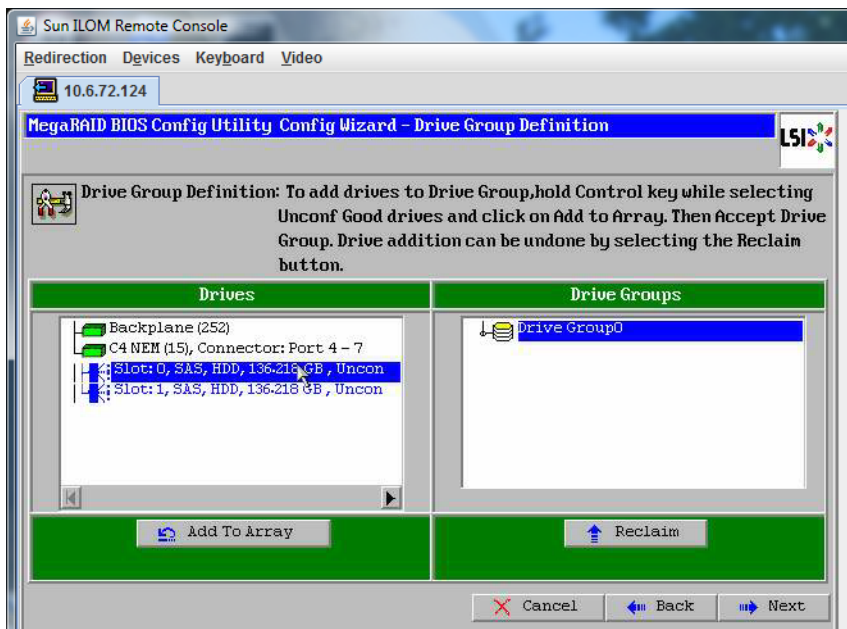
す。つまり、1つのドライブに障害が発生すると、システムが起動しなくなるということです。1つを除き、すべてのドライブを取り外す必要があります。または、「Manual Configuration」を選択して、1つのハードドライブだけを使用して仮想ドライブを作成することもできます。



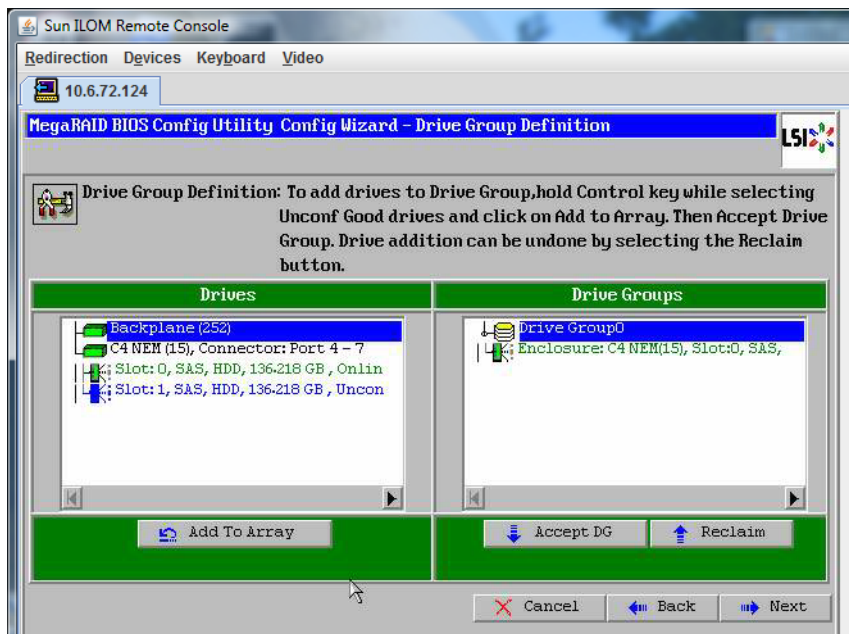
- 12 確認ウィンドウが表示されたら、「Yes」をクリックします。



- 13 「MegaRAID BIOS Config Utility Config Wizard – Drive Group Definition」画面に、システム内のドライブとドライブグループが表示されます。目的のドライブを選択して、「Add To Array」をクリックします。

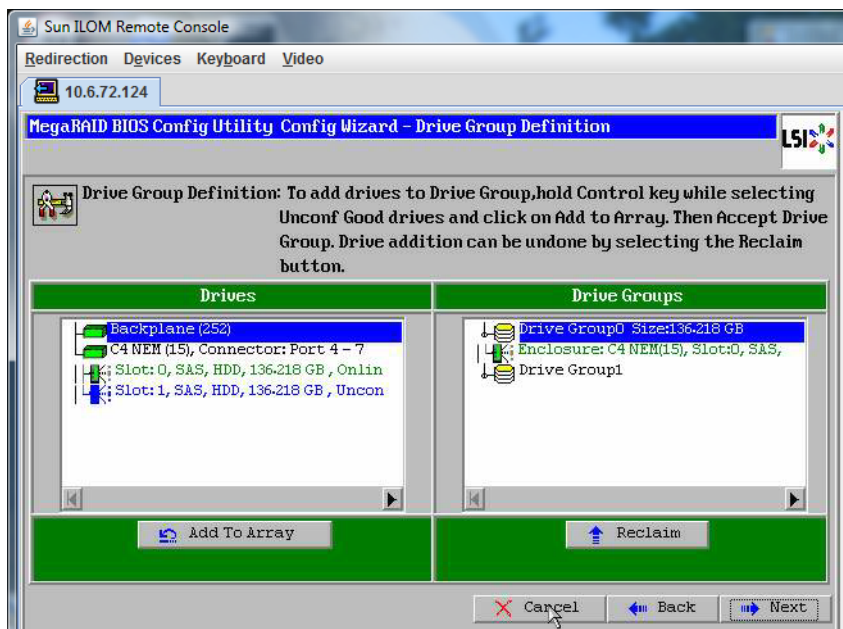


- 「Accept DG」をクリックしてドライブグループを作成します。
Drive Group0が表示されます。

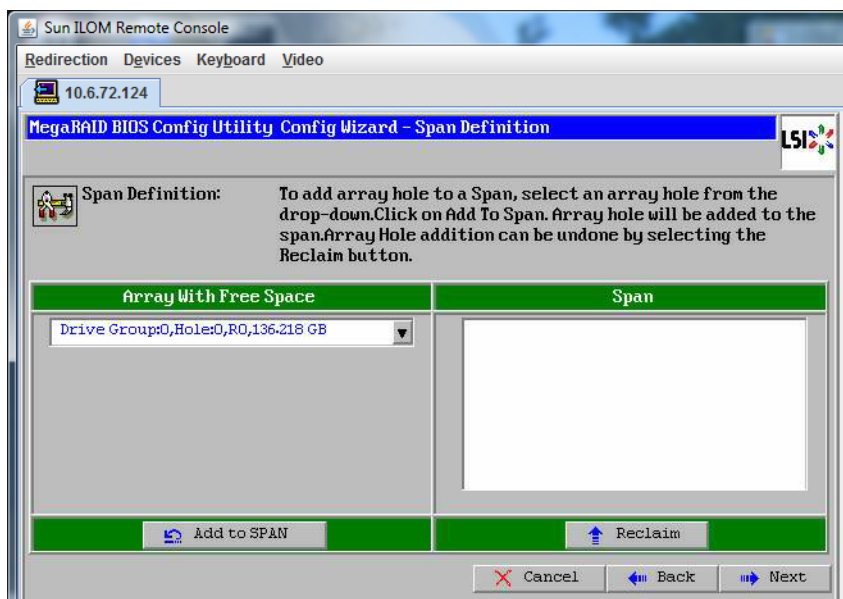


- 「次へ」をクリックします。

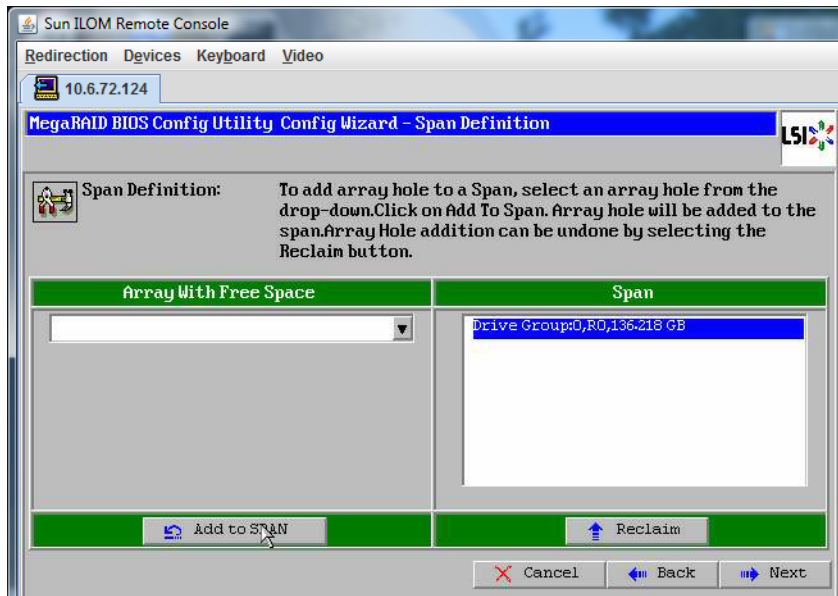
注- ドライブグループの選択は、「Reclaim」ボタンをクリックして取り消すことができます。



- 16 ドライブグループが「Span Definition」ウィンドウに表示されます。「Add to SPAN」をクリックします。

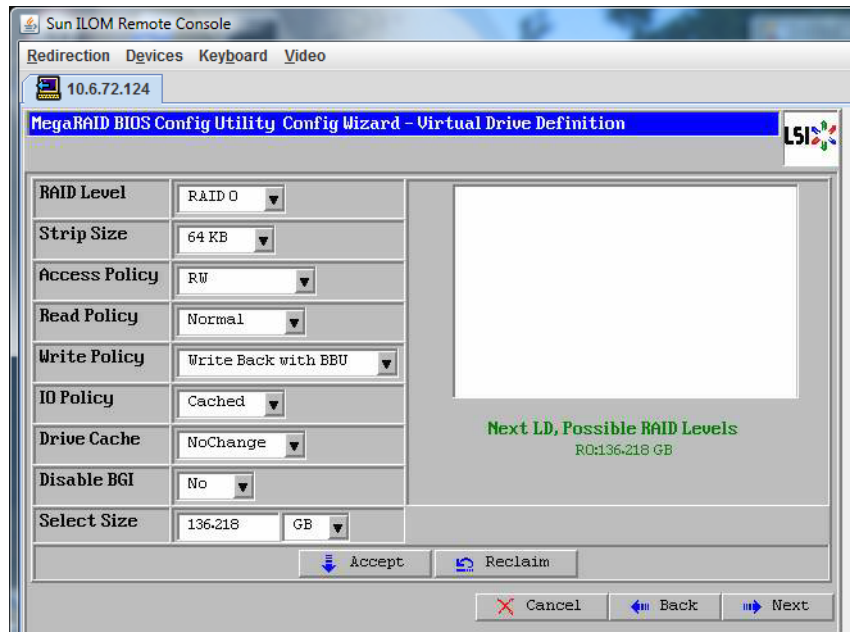


- 17 ドライブグループが「Span」に表示されます。「次へ」をクリックします。

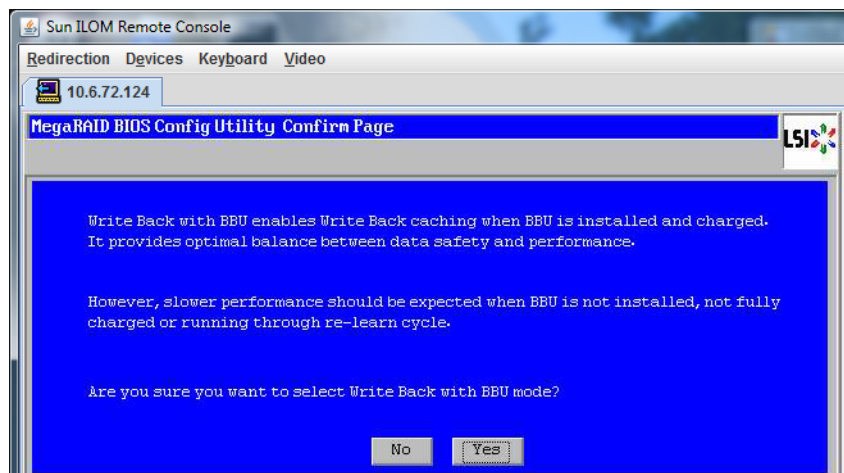


- 18 「Virtual Drive Definition」画面が表示されます。仮想ドライブのRAIDレベルと設定値を設定して、「Accept」をクリックします。

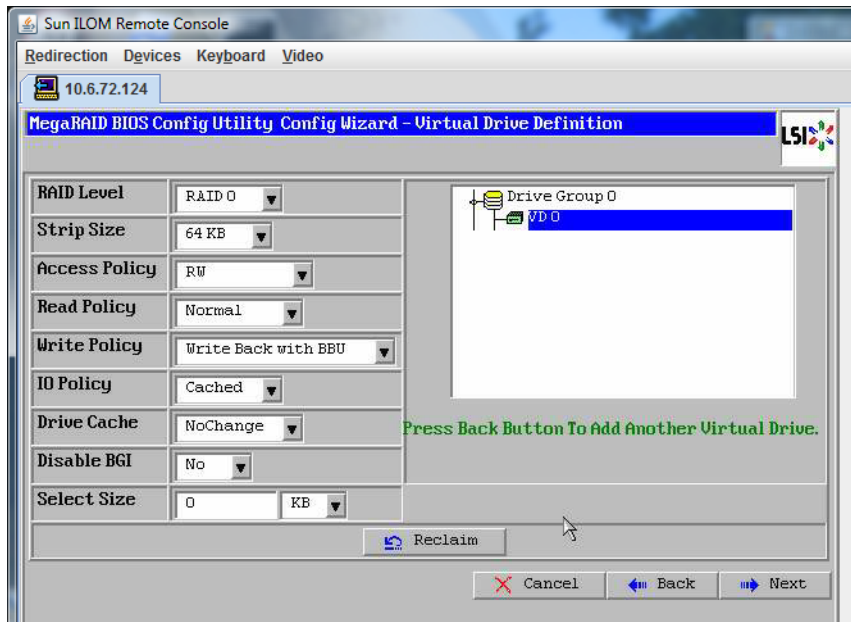
RAIDの設定については、サーバーのディスク管理マニュアルを参照してください。



- 19 「Write Back with BBU mode」を確認するプロンプトが表示されたら、「Yes」をクリックします。

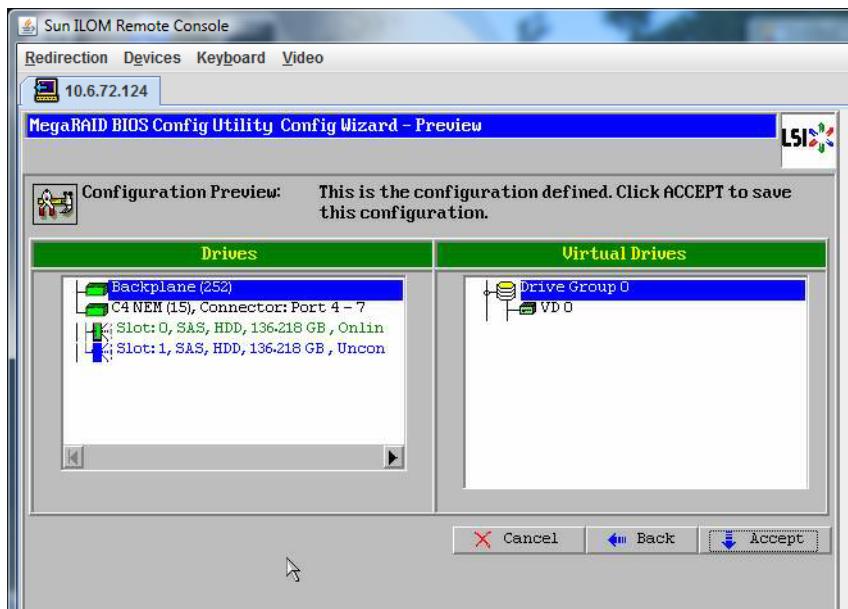


- 20 「Config Wizard」 ウィンドウで、「Next」 をクリックします。

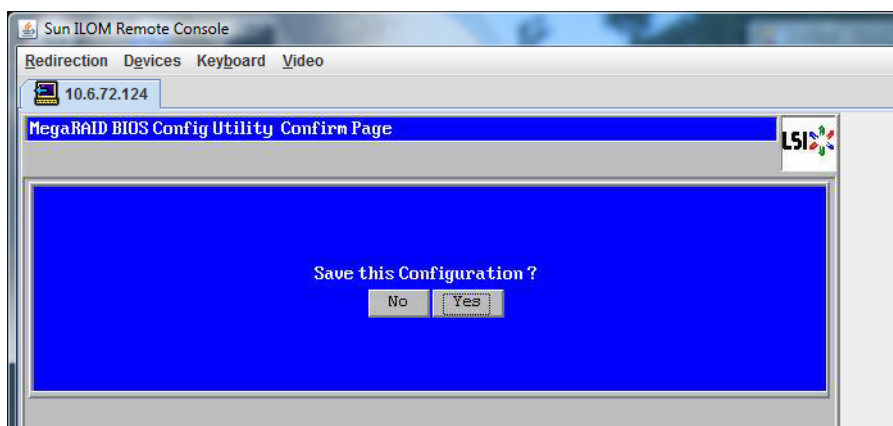


- 21 「Preview」画面が表示されます。仮想ドライブに**Drive Group 0**が含まれていることがわかります。

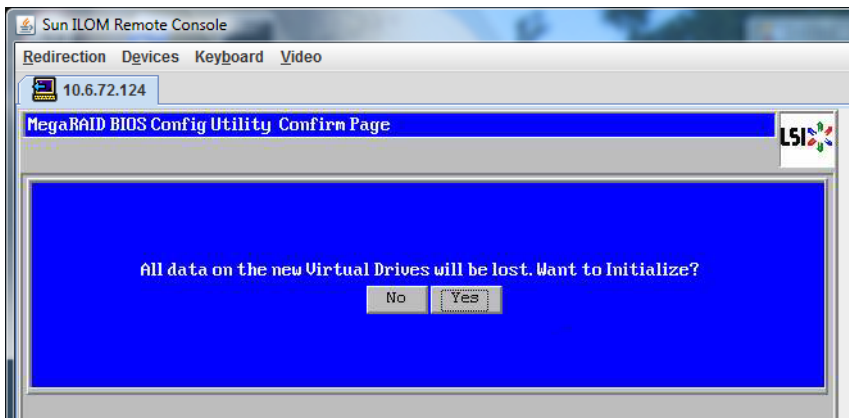
この図は、「Manual Configuration」オプションを使用した単一の仮想ドライブを示しています。



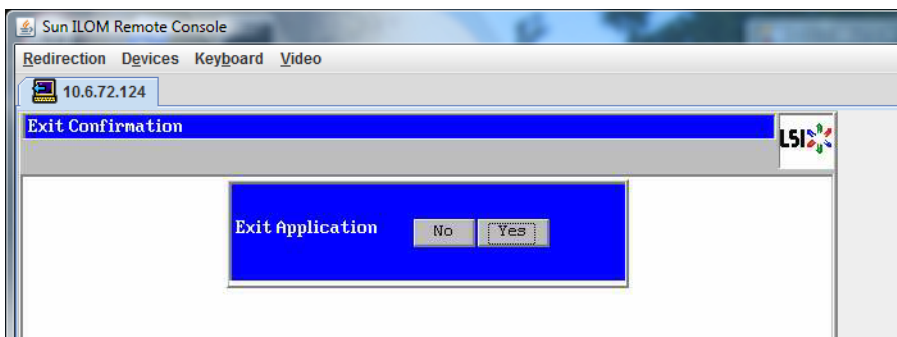
- 22 設定を保存します。



- 23 プロンプトに対して「Yes」をクリックします。仮想ドライブのすべてのデータが削除されます。初期化するかどうかを指定します。



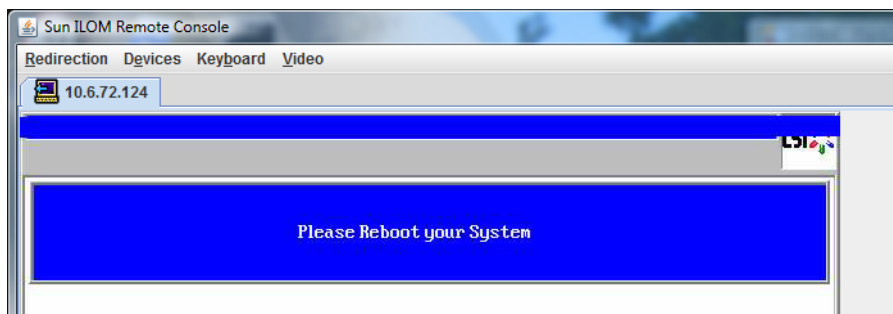
- 24 「Yes」をクリックして終了します。



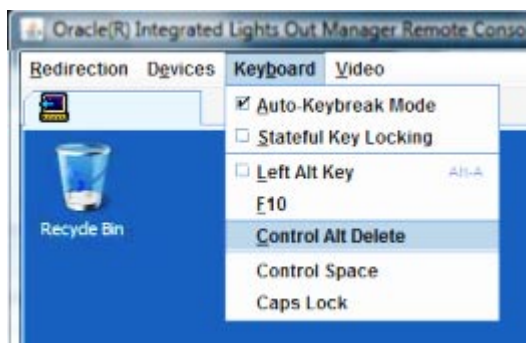
- 25 「Please Reboot Your System」と表示されたら、Alt キーを押しながら B キーを押して、キーボードプルダウンメニューを表示させます。



注意 - この手順を実行しない場合は、次の手順で「Control Alt Delete」を選択したときにローカルマシンが再起動されます。



- 26 矢印キーを使用してメニュー内の「Control Alt Delete」を選択し、リモートシステムを再起動します。Enterを押します。

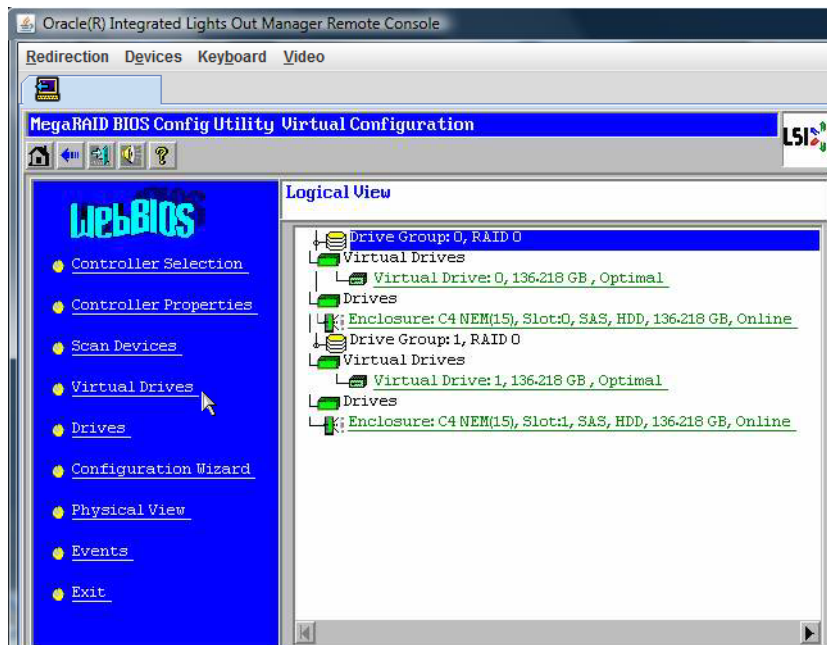


- 27 元の画面に戻り、マウスモードを「Absolute」に設定します。
- 「Remote Control」画面で「KVMS」タブを選択します。
 - 「Mouse Mode」で「Absolute」を選択します。
 - 「Save (保存)」をクリックします。

▼ ブートドライブを設定する方法

作成した仮想ドライブにオペレーティングシステムをインストールする場合は、ドライブをブートドライブとして設定する必要があります。

- 1 「Configuration Wizard」画面で「Virtual Drives」を選択します。



「MegaRAID BIOS Config Utility Virtual Drives Configuration」画面が表示されます。

- 2 オプションの1つとして「Set_Boot Drive (current=none)」が表示されているかどうかを確認します。
「Set_Boot Drive (current=none)」オプションが表示されている場合は、ブートドライブが設定されていません。



- 3 「Set_Boot Drive (current=none)」をオンにして、「Go」をクリックします。

メディアの取得方法の選択

この節では、Oracle VM インストールメディアの取得方法を選択する必要があります。

メディアの取得方法	その他の要件
シリアルポートまたはビデオポートとローカル DVD を使用: サーバーに接続された物理 CD/DVD ドライブと、サーバーのシリアルポートまたはビデオポートに接続された端末を使用します。	サーバーの USB ドングルポートに直接接続された USB CD/DVD ドライブを使用し、シリアルポートまたはビデオポートを通じてサーバーコンソールにアクセスします。29 ページの「シリアルポートまたはビデオポートを使用したコンソールへのアクセスによるローカルインストール」を参照してください。
ILOM とリモート DVD または ISO イメージを使用: JavaRConsole を実行しているリモートシステム上で、リダイレクトされた物理 CD/DVD ドライブか ISO イメージファイルを使用します。	ブラウザを備えたりリモートシステム、接続された物理 CD/DVD ドライブ、Linux 配布 DVD、サーバーの管理ポートへのネットワークアクセス。この方法を使用する場合は、32 ページの「ILOM を使用したコンソールへのアクセスによるリモートインストール」を参照してください。
PXE イメージを使用: PXE 環境から取得できるカスタマイズされたイメージを使用します。	サーバーのセットアップ、PXE の実行、使用しているサーバーに合わせてカスタマイズされたイメージ。『Sun Fire X4800 サーバー Linux オペレーティングシステム設置マニュアル』の「PXE インストールをサポートするための Linux サーバーの設定」を参照してください。

シリアルポートまたはビデオポートを使用したコンソールへのアクセスによるローカルインストール

OS をインストールするには、システムコンソールの出力を表示する必要があります。出力は、シリアルポートまたはビデオポートのどちらでも表示されます。

注- このトピックでは、デフォルトのビデオポート出力およびシリアルポート出力について説明します。コンソールコマンドや GRUB メニュー選択などのほかの設定では、動作が異なる場合があります。

端末またはノートパソコンを使用している場合は、マルチポートケーブル (別名「ドングル」) を使用してサーバーのシリアルポートまたはビデオポートに接続し、コンソールにアクセスできます。『Sun Fire X4800 サーバー設置マニュアル』の「[管理 \(SP\) ケーブルの接続](#)」を参照してください。

- シリアルポート - マルチポートケーブルのシリアルコネクタと、端末またはノートパソコンをシリアルケーブルで接続します。SP を起動してから OS が立ち上がるまでの間に、すべての出力がシリアルポートに表示されます。30 ページの「[シリアルポートの設定方法](#)」を参照してください。
- ビデオポート - KVM の VGA モニターケーブルをサーバーのマルチポートケーブルのビデオポートに接続します。SP の起動が完了すると POST/BIOS プロセスが開始し、すべての出力がビデオポートに表示されます。これは、OS が立ち上がるまで続きます。ほとんどの OS では、継続してビデオポートに情報が表示されます。ハードウェアのセットアップについては、『Sun Fire X4800 サーバー設置マニュアル』の「[管理 \(SP\) ケーブルの接続](#)」を参照してください。

▼ シリアルポートの設定方法

- 1 端末、または端末エミュレーションソフトウェアを実行しているノートパソコンを、サーバーのマルチポートケーブルを使用してシリアルポートに直接接続します。

次の端末設定を使用します。

8,n,1: データビット 8、パリティなし、ストップビット 1

9600 ボーレート

ソフトウェアのフローコントロール無効 (XON/XOFF)

- 2 サーバーの電源を入れます。
コンソール出力がシリアルポートに表示されます。
出力が表示されない場合は、BIOS で出力を設定する必要がある可能性があります。BIOS で出力を設定するには、次の手順に従います。
- 3 必要に応じて、BIOS の設定を確認します。
 - a. POST の実行中、起動プロセスの間に F2 (リモートキーボード上では F4) を押して BIOS に切り替えます。

- b. 右向き矢印キーを使用して「**Advanced**」タブに移動します。
左および右向き矢印キーを使用して「**BIOS Setup Utility (BIOS セットアップユーティリティ)**」メニュータブにアクセスできます。
 - c. 下向き矢印キーを使用して「**Remote Access Configuration**」オプションを強調表示し、**Enter** キーを押します。
「**Configure Remote Access type and parameters (リモートアクセスタイプとパラメータの構成)**」サブメニューの画面が表示されます。
 - d. 「**Remote Access**」が「**Enabled**」に設定されていることを確認します。
 - e. 「**Redirection after POST**」が「**Always**」に設定されていることを確認します。
 - f. 変更を保存して **BIOS** を終了するには、**F10** キーを押します。
- 4 **OS** に **GRUB** が含まれている場合は、同様に設定を行ってシリアルコンソールの設定パラメータを追加する必要がある場合があります。以下を実行します。
- a. **GRUB** メニューが表示されたら、「**e**」を押して編集します。
 - b. `/boot/grub/menu.lst` を変更します。たとえば、次のように入力します。

変更前:

```
# grub.conf generated by anaconda
#
# Note that you do not have to rerun grub after making changes to this file
# NOTICE: You have a /boot partition. This means that
#           all kernel and initrd paths are relative to /boot/, eg.
#           root (hd0,0)
#           kernel /vmlinuz-version ro root=/dev/sda3
#           initrd /initrd-version.img
#boot=/dev/sda
default=1
timeout=5
title Oracle VM Server-ovs (xen-2.6.18-164.el5ovs)
    root (hd0,0)
    kernel /xen.gz-2.6.18-164.el5
    module /vmlinuz-2.6.18-164.el5xen ro root=LABEL=/
    module /initrd-2.6.18-164.el5xen.img
title Oracle VM Server-ovs Server-base (2.6.18-164.el5)
    root (hd0,0)
    kernel /vmlinuz-2.6.18-164.el5 ro root=LABEL=/
    initrd /initrd-2.6.18-164.el5.img
```

変更後:

```
# grub.conf generated by anaconda
#
# Note that you do not have to rerun grub after making changes to this file
# NOTICE: You have a /boot partition. This means that
#           all kernel and initrd paths are relative to /boot/, eg.
```

```
#          root (hd0,0)
#          kernel /vmlinuz-version ro root=/dev/sda3
#          initrd /initrd-version.img
#boot=/dev/sda
default=1
timeout=5
serial --unit=0 --speed=9600
terminal --timeout=5 serial console
title Oracle VM Server-ovs (xen-2.6.18-164.el5ovs)
    root (hd0,0)
    kernel /xen.gz-2.6.18-164.el5 com1=9600 console=com1
    module /vmlinuz-2.6.18-164.el5xen ro root=LABEL=/ console=ttyS0,9600
    module /initrd-2.6.18-164.el5xen.img
title Oracle VM Server-ovs Server-base (2.6.18-164.el5)
    root (hd0,0)
    kernel /vmlinuz-2.6.18-164.el5 ro root=LABEL=/ earlylprintk=ttyS0,9600 console=ttyS0,9600
    initrd /initrd-2.6.18-164.el5.img
```

c. **-B console = ttya** と入力して、シリアルコンソールに直接出力します。

次の手順 ■ [39 ページの「Oracle VM のインストール」](#)

ILOM を使用したコンソールへのアクセスによるリモートインストール

サーバーの ILOM (Integrated Lights Out Manager) を使用すると、リモートシステムにマウントされた CD/DVD または ISO イメージを使用して、オペレーティングシステムをインストールできます。リモートコンソール機能によって、オペレーティングシステムをインストールしているサーバーに接続されているかのように、リモートシステムのキーボード、マウス、ビデオ、およびストレージを使用できます。リモートコンソールセッションを一度設定すれば、リモートでマウントされた配布メディア (CD/DVD またはそれに相当する ISO ファイル) からサーバーを起動できます。

この節では、JavaRConsole でリモートのコンソールシステムをセットアップしてネットワーク経由で Linux メディアを取得し、Sun サーバーにオペレーティングシステムをインストールする方法について説明します。次のいずれかの方法を選択します。

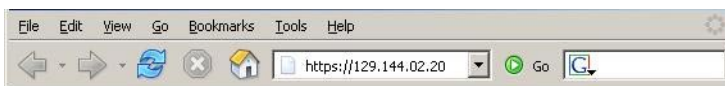
- [32 ページの「サーバーの ILOM Web インタフェースを使用したサーバーコンソールへのアクセス方法」](#)
- [37 ページの「サーバーの ILOM CLI インタフェースを使用したサーバーコンソールへのアクセス方法」](#)

▼ サーバーの ILOM Web インタフェースを使用したサーバーコンソールへのアクセス方法

始める前に 次の要件が満たされている必要があります。

- JavaRConsole システムでは、Solaris、Linux、または Windows が実行されている必要があります。
- Sun サーバーの Ethernet 管理ポートにアクセスできるネットワークに JavaRConsole システムが接続されている必要があります。
- Java Runtime Environment (JRE) 1.5 以降がインストールされている必要があります。CD-ROM のリダイレクトでは 32 ビット Java を使用する必要があります。
- JavaRConsole システムで Solaris を実行している場合は、JavaRConsole が CD/DVD-ROM ドライブにアクセスできるように、ボリューム管理を無効にする必要があります。
- JavaRConsole システムで Windows を実行している場合は、Internet Explorer の拡張セキュリティ機能を無効にする必要があります。
- サーバーの ILOM サービスプロセッサにネットワークアクセスできる必要があります (『Sun Fire X4800 サーバー設置マニュアル』の「管理 (SP) ケーブルの接続」を参照)。また、使用しているサーバーに対応した ILOM (Integrated Lights Out Manager) のドキュメントの指示に従い、ILOM の設定を済ませている必要もあります。

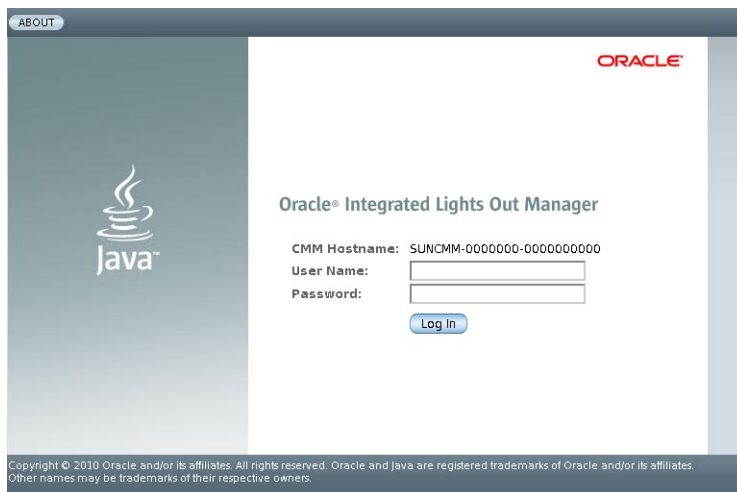
- 1 **Integrated Lights Out Manager (ILOM) サービスプロセッサの IP アドレスを JavaRConsole システムのブラウザに入力して、リモートコンソールアプリケーションを起動します。**



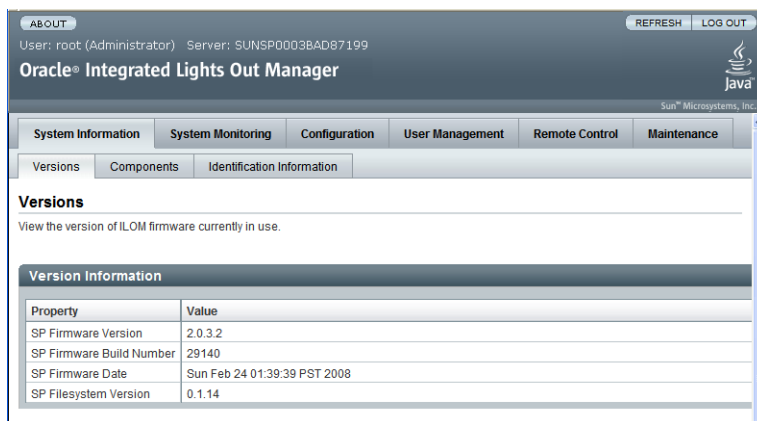
「Security Alert」ダイアログボックスが表示されます。



- 「Yes (はい)」をクリックします。
ILOM のログイン画面が表示されます。



- ユーザー名とパスワードを入力し、「Log In (ログイン)」をクリックします。
デフォルトのユーザー名は **root**、デフォルトのパスワードは **changeme** です。
ILOM の「Version Information (バージョン情報)」画面が表示されます。



- ILOM Web インタフェースで「Remote Control」タブをクリックします。
「Launch Redirection (リダイレクトの起動)」画面が表示されます。

注 - 「Mouse Mode Settings (マウスモード設定)」タブでマウスモードが Absolute (絶対) モードに設定されていることを確認します。

ABOUT REFRESH LOG OUT
User: root (Administrator) Server: SUNSP0003BAD87199
Oracle® Integrated Lights Out Manager
Sun® Microsystems, Inc.
Java

System Information System Monitoring Configuration User Management Remote Control Maintenance

Redirection Remote Power Control Mouse Mode Settings

Launch Redirection

Manage the host remotely by redirecting the system console to your local machine. Launch the Sun ILOM Remote Console to manage multiple blades from one window and utilize the RKVMS features.

Launch Remote Console

Storage Redirection

You can optionally redirect local CDROM / Floppy storage devices or CDROM / Floppy image files from your workstation to a blade host by using the non-graphical storage redirection utility. This consists of a background service process running on your local machine that manages and maintains redirection to a blade host. This service is Java Web Start based and can be started by clicking "Launch Service" below.

Launch Service

A scriptable, command-line Java client application is used to issue commands to the Service Processor for starting and stopping redirection of local storage devices and/or image files to one or more ILOM-enabled hosts. Click "Download Client" below and save as StorageRedir.jar locally, and get started by running `java -jar StorageRedir.jar -h` from a local command window prompt.

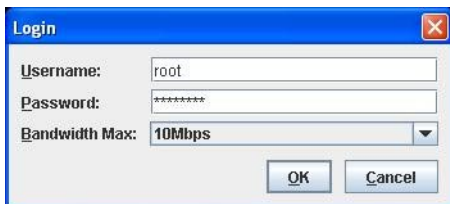
Download Client

- 5 「Launch Remote Console」をクリックします。

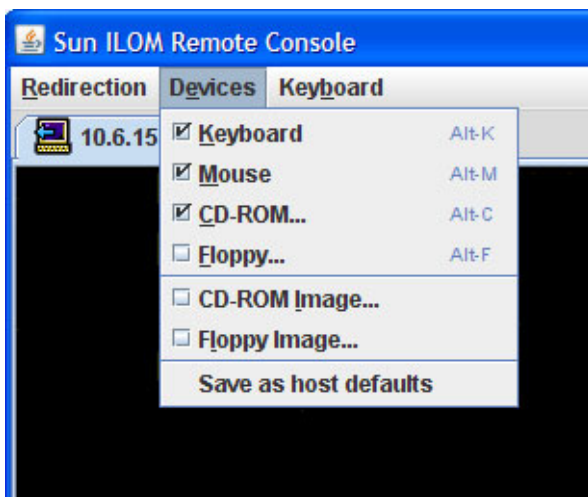
注 - JavaRConsole システムのリダイレクトに Windows システムを使用している場合は、「Launch Redirection (リダイレクトの起動)」をクリックした後に、警告がもう 1 つ表示されます。「Hostname Mismatch (ホスト名の不一致)」ダイアログボックスが表示されたら、「Yes (はい)」ボタンをクリックします。



場合によっては「Remote Control」ダイアログボックスが表示されます。



- 6 リモートコントロールの「Login」ダイアログボックスを使用して再度ログインするよう要求された場合は、ユーザー名とパスワードを入力し、「OK」をクリックします。
デフォルトのユーザー名は **root**、パスワードは **changeme** です。
正常にログインすると、JavaRConsole 画面が表示されます。
- 7 選択した取得方法に応じて、「Devices」メニューから CD のオプションを 1 つ選択します。



- **CD-ROM リモート:** JavaRConsole システムに接続された CD/DVD-ROM ドライブからオペレーティングシステムソフトウェア CD/DVD のコンテンツにサーバーをリダイレクトする場合は、「CD-ROM」を選択します。
- **CD-ROM イメージ:** JavaRConsole システム上にあるオペレーティングシステムソフトウェアの .iso イメージファイルにサーバーをリダイレクトする場合は、「CD-ROM Image」を選択します。



注意-CD-ROM リモートまたは CD-ROM イメージのオプションを使用して Linux OS をインストールすると、CD-ROM のコンテンツにネットワーク経由でアクセスするため、インストールにかかる時間が大幅に長くなります。インストールにかかる時間は、ネットワークの接続状態とトラフィックによって異なります。

次の手順 ■ 39 ページの「Oracle VM のインストール」

▼ サーバーの **ILOM CLI** インタフェースを使用したサーバーコンソールへのアクセス方法

- 1 端末ウィンドウを開き、次のコマンドを入力して **CMM** への **SSH** 接続を確立します。

```
# ssh root@sp_ip
```

sp_ip は、サーバーのサービスプロセッサの IP アドレスです。

ログインプロンプトが表示されます。

- 2 次に示すように、**root** としてログインしてルートパスワードを入力します。

```
/hostname/login: root
```

```
password:xxxxxxx
```

正常にログインすると、次のプロンプトが表示されます。

```
->
```

- 3 コンソールにリダイレクトするには、次のコマンドを入力します。

```
-> start /SP/console
```


Oracle VM のインストール

使用しているサーバーで、Oracle VM 2.2.1 を動作させることができます。Oracle VM は、仮想マシン (VM) を作成して管理できる仮想化環境プラットフォームです。これらの各仮想マシンは同一の物理サーバー上に存在しますが、独立した別個の物理サーバーのように動作します。Oracle VM で作成された各仮想マシンには、仮想の CPU、オペレーティングシステム、ネットワークインタフェース、およびストレージがそれぞれ割り当てられます。

Oracle VM は次のコンポーネントで構成されています。

- **Oracle VM Manager:** 仮想マシンを作成および管理するためのユーザーインタフェースとして機能する Web アプリケーション。仮想マシンの作成 (テンプレートを含む)、ライフサイクルの管理 (配置、移行、削除)、およびリソースの管理 (ISO ファイル、テンプレート、共有ストレージリソース) などの機能が含まれます。
- **Oracle VM Server:** Xen ハイパーバイザーを基盤とし、仮想マシンおよび Oracle VM Agent の実行に使用される軽量かつセキュアな仮想化環境。
- **Oracle VM Agent:** Oracle VM Server 上にインストールされ、Oracle VM Manager と通信します。Oracle VM Server、サーバープール、およびリソースを管理するための Web サービス API が含まれています。

この節では、Oracle VM のインストールに関する次のトピックについて説明します。

手順	説明	リンク
1	Oracle VM インストールの概要について理解します。	39 ページの「Oracle VM のインストール」
2	システム要件を確認します。	40 ページの「システム要件」
3	インストールイメージを入手して DVD に書き込むか、またはサーバー上にコピーします。	41 ページの「Oracle VM ソフトウェアの入手方法」
4	Oracle VM Server をインストールします。	41 ページの「Oracle VM Server のインストール方法」

手順	説明	リンク
5	Oracle VM Manager をインストールします。	42 ページの「Oracle VM Manager のインストール方法」
6	共有ストレージ、サーバープール、および仮想マシンを作成します。	43 ページの「VM リソースの作成および管理」

システム要件

- Oracle VM のインストールには、静的 IP アドレスが割り当てられた 2 つのシステムが必要です。一方のシステムで Oracle VM Server を実行し、もう一方のシステムで Oracle VM Manager を実行します。
- Oracle VM Server を実行するシステムでは、最初にクリーンインストールを実行して、プリインストールされた OS やファームウェアレベルの RAID ボリュームを削除する必要があります。
- Oracle VM Manager を実行するシステムには、次の OS のいずれかをインストールする必要があります。
 - Oracle Enterprise Linux Release 4.5 以降
 - Red Hat Enterprise Linux Release 4 以降
- Oracle VM メディアセットまたはそれに相当する ISO イメージ。ISO イメージを使用すると、リモートインストールの実行や、インストール CD/DVD の作成が可能です。
- Oracle VM ソフトウェアのリリースノートを確認します。このドキュメントセットは、http://download.oracle.com/docs/cd/E15458_01/index.htmにあります。
- DVD-ROM ドライブ。

注- リモートインストールを実行する場合は、DVD-ROM ドライブ、キーボード、マウス、およびモニターを、サーバーではなくローカルシステムに接続します。また、実際の CD/DVD ではなく、ISO イメージを使用することもできます。

- USB で接続したキーボードとマウス。
- モニター。
- ネットワークを使用したサーバーのオペレーティングシステムの設定時に、Oracle VM Server で使用されている各ネットワークインタフェースの (OS によって割り当てられた) 論理名および物理名 (MAC アドレス) の指定が必要となる場合があります。詳細については、『Sun Fire X4800 サーバー Linux オペレーティングシステム設置マニュアル』の「Linux OS 設定用の論理および物理ネットワークインタフェース名の特定」を参照してください。

▼ Oracle VM ソフトウェアの入手方法

- 1 Oracle VM ソフトウェアを以下の Web サイトからダウンロードします。

<http://www.oracle.com/virtualization>

- 2 ソフトウェアをシステムにインストールする場合は、ISO イメージを CD/DVD に書き込みます。

Oracle VM Manager の CD/DVD と、ブート可能な Oracle VM Server の CD/DVD を入手する必要があります。

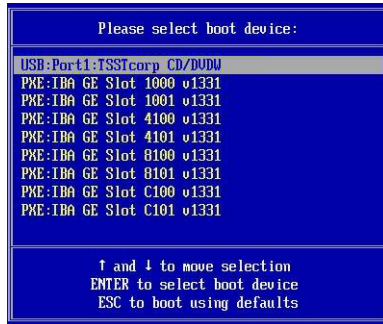
▼ Oracle VM Server のインストール方法

始める前に 40 ページの「システム要件」を参照してください。

- 1 次のいずれかの方法を使用して、サーバーコンソールに接続します。
 - 29 ページの「シリアルポートまたはビデオポートを使用したコンソールへのアクセスによるローカルインストール」
 - 32 ページの「ILOM を使用したコンソールへのアクセスによるリモートインストール」
- 2 まだ行っていない場合は、手順 1 で選択した方法に応じて、Oracle VM Server の配布 CD/DVD を挿入するか、または ISO イメージ配布メディアにアクセスします。
- 3 サーバーの電源を入れるか、またはリセットします。
BIOS メッセージがコンソールに表示されます。



- 4 メッセージで選択肢が表示されたら、**F8**を押します。
しばらくすると、起動デバイスの選択メニューが表示されます(次の例を参照)。



- 5 一覧から起動デバイスを選択します。
物理 CD/DVD または ISO イメージから起動するには、CD/DVD を選択します。
制御がメディア上の OS インストールプログラムに移ります。
- 6 ブートプロンプトに「**Enter**」と入力します。
- 7 表示に従ってソフトウェアをインストールします。
Oracle VM Server および Oracle VM Agent ソフトウェアがインストールされます。
詳細については、以下にある Oracle VM Server のインストールガイドを参照してください。

http://download.oracle.com/docs/cd/E15458_01/index.htm

▼ Oracle VM Manager のインストール方法

始める前に Oracle VM Server を Sun サーバーにインストールしている場合は、リモートシステムにマウントされた CD/DVD または ISO イメージを使用して、ILOM (Integrated Lights Out Manager) でソフトウェアをインストールできます。リモートコンソール機能によって、オペレーティングシステムをインストールしているサーバーに接続されているかのように、リモートシステムのキーボード、マウス、ビデオ、およびストレージを使用できます。リモートコンソールセッションを一度設定すれば、リモートでマウントされた配布メディア (CD/DVD またはそれに相当する ISO ファイル) からサーバーを起動できます。

- 1 サポートされているオペレーティングシステムを実行しているサーバーで、**Oracle VM Manager** の CD を挿入してマウントします。
- 2 CD のルートに移動して、次のスクリプトを実行します。

```
# sh runInstaller.sh
```

注 - まだ root ユーザーでない場合は、su コマンドを使用してルートパスワードを入力し、インストールスクリプトを起動するのに必要な権限を自身に付与します。

3 表示に従ってソフトウェアをインストールします。

詳細については、以下にある Oracle VM Manager のインストールガイドを参照してください。

http://download.oracle.com/docs/cd/E15458_01/index.htm

VM リソースの作成および管理

Oracle VM Server と Oracle VM Agent、および Oracle VM Manager をインストールすると、仮想リソースを作成、管理できます。

- 共有ストレージリポジトリを作成します。耐障害性の向上を目的に、このストレージを使用する複数の仮想マシンをクラスタ構成内でセットアップできます。共有ストレージのオプションは次のとおりです。
 - iSCSI (Internet SCSI) ネットワークプロトコルを使用した OCFS2 (Oracle Cluster File System)
 - SAN (Storage Area Network) を使用した OCFS2
 - NFS (Network File System)
 - マルチパスフェイルオーバーが可能なパーティション
- 仮想マシンのサーバープールを作成します。
- サーバープールに仮想マシンを作成します。

詳細については、以下にある Oracle VM のインストールガイドを参照してください。

http://download.oracle.com/docs/cd/E15458_01/index.htm

